様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２８４０

研究課題名（和文）日本語学習者のポライトネスに関わる言語運用についての基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on language operations related to the politeness of learners of Japanese.

研究代表者
牧原　功（MAKIHARA, Tsutomu）

群馬大学・国際センター・准教授

研究者番号：２０３３２５６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は外国人日本語学習者が産出する日本語の発話・文章を、ポライトネスという観点から日本語母語話者がどのように受け取り評価しているのかを分析することを目的とした。
当初は日本語学習者の産出する日本語を収集し、日本語母語話者に印象評価を依頼するという研究方法を想定したが、COVID-19の感染拡大により、既存のコーパス等をもとに言語研究者が考察を進めるという方法にシフトしつつ研究を継続した。
主要な成果として、4冊の書籍の発刊、論文の発表の他、日本語のポライトネスに密接に関わる配慮表現の普遍性についての国際語用論学会での発表、日本語用論学会でのポライトネスの対照研究についての発表が挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は語用論における配慮表現研究を着想のもととするものであり、語用論と言語教育の境界的な研究として位置付けられる。日本語教育と語用論との関係では、外国語学習者の談話運用についての研究はこれまでも活発に行われてきたが、ポライトネスという側面から見た言語運用の研究は不十分な状況であった。
本研究は、統語論的、意味論的、形態論的に如何に正確な言語運用を行おうとも、対人コミュニケーションツールとしての言語運用という観点から見ると不完全であるということを指摘し、言語学習者の到達目標の設定、言語教育におけるシラバスの設計の方向性等に多くの示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to analyse how native Japanese speakers receive and evaluate Japanese utterances and sentences produced by foreign learners of Japanese from the perspective of politeness. Initially, we envisaged a research method of collecting Japanese produced by learners of Japanese and asking native speakers of Japanese to evaluate their impressions, but due to the spread of the COVID-19 infection, we continued the research while shifting to a method in which linguistic researchers proceed with their considerations based on existing corpora and other data. Major achievements include the publication of four books and articles, as well as a presentation at the International Pragmatics Association on the universality of expressions of consideration closely related to Japanese politeness, and a presentation on a controlled study of politeness at the Pragmatics Society of Japan.

研究分野：言語学

キーワード：ポライトネス　配慮表現　語用論　第二言語習得　対照研究　日本語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は語用論における配慮表現研究を着想のもととするものであり、語用論と言語教育の境界的な研究として位置付けることができる。
日本語の研究においては、1999 年の国語審議会第 22 期第 1 委員会で、「僭越ではございますが」のように相手に遠慮した表現や、「春らしいスカーフですね」のように積極的に相手を喜ばせる表現などについて注目し、これを配慮表現と呼んだ。これらの現象は、ポライトネス理論によって説明が可能なものも多いが、現象より先に説明理論であるポライトネスが先行することにより、日本語におけるこの種の言語現象の多様性、広がりの大きさが見落とされているのが現状であった。この点について、平成 21 年度から 23 年度にかけて取得した科学研究費基盤研究（C）「日本語の配慮表現の研究とその日本語教育への応用」（研究課題番 21520524、研究代表者：牧原功、研究分担者：山岡政紀、小野正樹）、同様に平成 25 年度から 28 年年度の基盤研究（C）「日本語の配慮表現に関する学習者コーパスの作成と対照研究」（研究課題番号 25370576、研究代表者：牧原功、研究分担者：山岡政紀、小野正樹、俵山雄司、大和啓子）、平成 25 年度から 28 年度の基盤研究（C）「発話機能を中軸とする日本語配慮表現データベースの構築」（研究課題番号 25370529、研究代表者：山岡政紀、研究分担者：小野正樹、牧原功、斉藤幸一、大塚望、山下由美子）において、日本語の配慮表現に関わる言語現象の収集と分析を行い、その説明理論の一つとしてポライトネス理論の適用可能性を検討してきた。またそれとともに、日本語学習者の配慮表現の習得についてもデータを収集し分析を行っている。これら研究の成果の積み重ねを経て、2010 年には山岡政紀、牧原功、小野正樹の共著として『コミュニケーションと配慮表現』（明治書院）を上梓することができた。その後、三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』（ひつじ書房）、三宅和子・野田尚史・生越直樹編(2012)『「配慮」はどのように示されるか』（ひつじ書房）、野田尚史・高山善行・小林隆(2014)『日本語の配慮表現の多様性』（くろしお出版）等が出版され、研究テーマとしての重要性の認識が進んでいるように思われる。
本研究は申請者らがこれまで行ってきた、上記のような配慮表現に関する一連の研究から着想を得、日本語の配慮表現がどの程度言語普遍性を持つものであるか、外国人日本語学習者のポライトネスの習得の状況がどのようになっているのかについて考察し、それらをもとに言語教育に、ポライトネスへの視野の提供を行おうとするものである。

２．研究の目的

本研究は、日本語学習者が、日本語の運用において、どのような対人配慮を行って発話をし、それを日本語母語話者がどのように受け止めているかということを明らかにすることを目的とするものである。研究開始時までの研究により、研究代表者及び研究分担者が日本語配慮表現の概要を把握できつつあること、日本語学習者の配慮表現の習得状況の分析が進みつつあることは大きな進展であると考えるが、その一方で、いわゆる配慮表現として扱われる成分の多くが、日本語のレベルとしては中級からそれ以上のレベルの学習者の習得するものであるということもわかってきた。しかし実際に日本語母語話者が日本語学習者の発話なり文章なりを受容する際、失礼な表現であるとか、対人的な配慮に欠けるという印象を持つというのは、中級以上の学習者に限られる現象ではない。
本研究は、初級学習者の習得する文法項目の運用等によって生じる対人配慮の不十分さまでを含めて研究対象とし、外国人日本語学習者の用いる日本語をポライトネスという観点から日本語母語話者がどのように受け取っているのかを検証することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は日本国内での研究担当者 4 名（研究代表者・研究分担者）と海外の研究協力者 4 名との共同作業として進めた。当初は日本語教育等に関わりのない日本語母語話者を被験者とし、外国人日本語学習者の産出した日本語への印象評価を行う予定であった。しかしながら COVID-19 の感染拡大により対面での調査の実施に困難を生じたため、研究方法を既存のコーパスの利用、言語研究者による判断を中心とするものに変更し、研究を継続した。研究遂行にあっては、日本国内の研究グループは、コーパスにおける学習者の産出した日本語を分析し、母語話者がポライトネスという観点から不適切な運用をしていると判断する可能性のあるものを抽出した。そしてそれらの要素を含む文について対照言語学的な観点から考察し、最終的には日本語学習者のポライトネスに関わる表現を習得する上での問題点を示すことを目指した。海外の研究協力者も当初は日本語学習者のデータ収集を行うことを想定したが、COVID-19 の影響により当初の計画を変更し、日本国内の研究担当者と共に、対照言語学的観点からの考察を進めた。

４．研究成果

以下に主要な研究成果を示す。これら成果は書籍への収録や、学会発表、論文によって公開されている。

(1)日本語の文法項目とポライトネスとの関連についての研究
研究代表者の牧原は日本語母語話者がテンス・アスペクトを体系的に使い分け、主張の丁寧さをコントロールしていることが判明した。具体例で示せば、論文査読のような批判的な発言を多用する文章では「この点には問題があるように思います」というル形の使用を避け、「この点には問題があるように思いました」のようにタ形が多用される傾向が見られることや、聴者の想定と異なる事実を述べる際「娘は 3 年前に結婚しています」というテイル形よりも「娘は 3 年前に結婚しました」のようなタ形を選択するといったものである。また日本語の授受表現が配慮表現として慣習化する現象についても考察を進めた。

(2)日本語の配慮表現の慣習化に関わる研究
研究分担者の山岡は、これまで統語論の範疇で検討の対象とされてきたモダリティを発話機能の慣習化という語用論的視点から把握し直すことを提唱し、合理的かつ整合性のある理論構築が可能であることを示した。

(3)日本語学習者の母語とわかり易い日本語との関係についての研究
研究分担者の小野は、特定の言語話者（ロシア語話者）の好む日本語の表現に着目し、非母語話者にとって理解しやすい日本語と、母語話者にとって理解しやすい日本語が異なることを示し、また、言語の身体性と語用論との関りについて言及した。更に、日本語の多様性という観点から日本語母語話者、非母語話者それぞれの言語運用を問い直し、そこからポライトネスの習得、教育に関わる提言を行った。

(4)日本語の配慮表現として慣習化された言語形式についての研究
研究分担者の大和は、会話に見られる「てしまう」について縮約形「ちゃう」との対比を行いながら分析を進め、ポライトネスストラテジーとして理解することで日本語学習者にとって有益となる言語現象の把握を試みた。また、会話に頻繁に表れる「なんか」がポライトネスストラテジーとして機能すること、「せっかくですが」にも同様にポライトネスに特化した慣習化された用法があることを示すなど、様々な研究を進展させた。

(5)名詞化によるポライトネスに関わる研究
2021 年 6 月の第 17 回国際語用論学会において、研究代表者の牧原功と研究分担者の小野正樹は、名詞化という現象を動作の背景化・意思の背景化という観点から分析し、日本語の配慮表現の一つとできることを提案した。

(6)配慮表現の普遍性に関わる研究
題 17 回国際語用論学会において、研究分担者の山岡政紀は配慮表現の普遍性について報告し、海外研究協力者の李奇楠は中国語の配慮表現について発表し、その普遍性を主張した。

(7)ポライトネス・配慮表現の対照研究
2020 年 11 月に開催された第 23 回日本語用論学会ではポライトネスを表示する配慮表現の対照研究についてのワークショップを開催し、牧原と小野は日本語の配慮表現について報告し、海外研究協力者の李は中国語の配慮表現について触れた。その他、英語の配慮表現についての考察も示され、山岡が配慮表現の普遍性を主張した。
2021 年 12 月の第 24 回本語用論学会においても継続してワークショップを開催し、配慮表現の対照研究の成果を報告した。牧原は配慮表現に関わるテンスの日英対照を行い、小野は禁止表現における背景化の多言語対照について触れ、山岡は副詞による賛同表現の日英対照を、海外研究協力者の李はマイナス評価の配慮表現に関する日中対照を行い、活発な議論が行われた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 牧原功	４．巻 11
２．論文標題 話題転換とポライトネス －話題転換に用いる接続表現－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大和啓子	４．巻 11
２．論文標題 補助動詞「ておく」の使用が示す配慮	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	６．最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山岡政紀	４．巻 16
２．論文標題 配慮表現はいかに普遍的であるか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語用論学会第23回大会発表論文集	６．最初と最後の頁 165-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小野正樹、牧原功	４．巻 16
２．論文標題 日本語の配慮表現	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語用論学会第23回大会発表論文集	６．最初と最後の頁 169-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牧原功	4．巻 10
2．論文標題 日本語の挨拶表現とポライトネス－「こんにちは」について－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野正樹	4．巻 10
2．論文標題 CEFRから見る多様な日本語コミュニケーションの必要性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大和啓子	4．巻 10
2．論文標題 丁寧系で用いられる「てしまう」縮約形「ちゃう」の配慮機能	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山岡正紀	4．巻 Social Sciences
2．論文標題 A dictionary of Considerate Expressions	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Impact	6．最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野正樹	4．巻 1
2．論文標題 Language and corporeality from a pragmatic perspective.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 文明のクロスロード 12 多元性のパラダイムを求めて「中央アジアと日本における文化的・社会的多元性と共生」論文集	6．最初と最後の頁 515-524
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野正樹	4．巻 9
2．論文標題 語用論からみる言語と身体性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牧原　功	4．巻 8
2．論文標題 日本語教科書に見られるポライトネスストラテジー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野正樹	4．巻 8
2．論文標題 越境する日本語	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 88-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牧原功	4．巻 7
2．論文標題 日本語の繰り返し表現と意味の派生	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山岡政紀	4．巻 7
2．論文標題 日本語配慮表現の分類と語彙リストについて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野正樹	4．巻 1
2．論文標題 フレキシビリティから考える日本語らしさ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 「文明の対話と翻訳・翻案」論文集	6．最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山岡政紀	4．巻 23
2．論文標題 配慮表現の慣習化をめぐる一考察―メタファーとのアナロジーをもとに―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本語日本文学	6．最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計36件（うち招待講演　0件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 牧原功
2．発表標題 「させていただく」の丁重語化について
3．学会等名 第14回本語コミュニケーション研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 大和啓子
2．発表標題 断りの配慮表現「せっかくですが、今日はやめておきます」の分析
3．学会等名 第14回本語コミュニケーション研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 牧原功
2．発表標題 話題転換とポライトネス
3．学会等名 第13回本語コミュニケーション研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 大和啓子
2．発表標題 補助動詞「～ておく」の諸用法
3．学会等名 第13回本語コミュニケーション研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 牧原功・西田光一
２．発表標題 ワークショップ　配慮表現の対照研究 ②　配慮表現に関わるテンスの日英対照
３．学会等名 日本語用論学会第24回大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小野正樹、西田光一、リナ・アリ
２．発表標題 ワークショップ　配慮表現の対照研究 ②　禁止表現における背景化の多言語対照
３．学会等名 日本語用論学会第24回大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 李楠南、山岡雅紀
２．発表標題 ワークショップ　配慮表現の対照研究 ②　マイナス評価の配慮表現に関する日中対照
３．学会等名 日本語用論学会第24回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山岡雅紀、甲田直美、西田光一
２．発表標題 ワークショップ　配慮表現の対照研究 ②　副詞による賛同表現の日英対照
３．学会等名 日本語用論学会第24回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 配慮表現データベースの項目について－配慮表現に特化した授受表現・インポラトネス としての比較表現－
３．学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山岡正紀
２．発表標題 配慮表現「自分で言うのも何ですが」に関する考察
３．学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小野正樹
２．発表標題 文末名詞化表現とポライトネスについての一考察
３．学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大和啓子
２．発表標題 談話における「てしまう」縮約形「ちゃう」の使用について
３．学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山岡雅紀
２．発表標題 ワークショップ　配慮表現の対照研究①　配慮表現はいかに普遍的であるか
３．学会等名 日本語用論学会第23回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 牧原功・小野正樹
２．発表標題 ワークショップ　配慮表現の対照研究 ①　日本語の配慮表現
３．学会等名 日本語用論学会第23回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 日本語のポジティブポライトネスストラテジー
３．学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山岡正紀
２．発表標題 発話機能が慣習化した第3モダリティ
３．学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大和啓子
２．発表標題 てしまう縮約形ちゃうの用法とその特徴
３．学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 二ノ宮崇司、李国玲、リナ アリ、朱炫、高揚、ウマロワ ムノジャット、フルカル　カミロヴナ、レーティトゥ ハー、小野 正樹
２．発表標題 日本語母語話者・日本語学習者による禁止・依頼表現の評価―ポライトネスの観点から―
３．学会等名 未来志向の日本語教育2.0
４．発表年 2020年

１．発表者名 YAMAOKA Masaki
２．発表標題 How Universal are Considerate Expressions?
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 MAKIHARA Tsutomu, ONO Masaki
２．発表標題 On the Considerate Expressions in Japanese.
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野正樹
２．発表標題 寛容な日本語の記述に向けて
３．学会等名 2020日本語コミュニケーション研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 ポライトネスとテンス・アスペクト
３．学会等名 2020日本語コミュニケーション研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大和啓子
２．発表標題 「～てしまう」に見られる配慮
３．学会等名 2019日本語コミュニケーション研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 テンス・アスペクトの配慮表現としての側面
３．学会等名 2019日本語コミュニケーション研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野正樹
２．発表標題 数量表現と配慮表現についての覚書
３．学会等名 2019日本語コミュニケーション研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大和啓子
２．発表標題 ポライトネスにおける発話機能の慣習化
３．学会等名 2019日本語コミュニケーション研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 配慮副詞としての「ちょっと」再考
３．学会等名 第10回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山岡政紀
２．発表標題 配慮表現データベース試用版の入力について
３．学会等名 第10回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小野正樹
２．発表標題 引用話法から見るポライトネス
３．学会等名 第10回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 日本語教科書とポライトネス
３．学会等名 『中日交流標準日本語』出版30周年学術検討会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山岡政紀
２．発表標題 日本語固有の配慮表現と中級表現文型
３．学会等名 北京大学創立120周年記念国際学術シンポジウム「日本と世界：文明の伝播、交流と発展」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小野正樹
２．発表標題 コミュニケーション言語としての日本語の多様性と受容性
３．学会等名 北京大学創立120周年記念国際学術シンポジウム「日本と世界：文明の伝播、交流と発展」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小野正樹・牧原功・李奇楠・山岡政紀
２．発表標題 現代日本語の繰り返し表現――表現形式と対人的機能の観点から
３．学会等名 Tenth International Conference on Practical Linguistics of Japanese, National Institute for Japanese Language and Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 牧原功
２．発表標題 ポライトネスにおけるフレキシビリティ－ネガティブポライトネスとポジティブポライトネスの選択性－
３．学会等名 第9回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山岡政紀
２．発表標題 ポライトネス・ストラテジーにおける表現選択の慣習化をめぐって
３．学会等名 第9回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 小野正樹
２．発表標題 フレキシビリティと言語学・日本語教育の可能性
３．学会等名 第9回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

1．著者名 山岡政紀、牧原功、小野正樹、大和啓子他	4．発行年 2019年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 272
3．書名 日本語配慮表現の原理と諸相	

1．著者名 山岡政紀、滝浦真人、鍋島弘治朗他	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 291
3．書名 日本語語用論フォーラム	

1．著者名 山岡政紀、牧原功、小野正樹	4．発行年 2018年
2．出版社 明治書院	5．総ページ数 196
3．書名 新版 日本語語用論入門	

1．著者名 牧原功他	4．発行年 2017年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 242
3．書名 習ったはずなのに使えない文法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山岡　政紀 (YAMAOKA Masaki) (80220234)	創価大学・文学部・教授 (32690)	
研究分担者	小野　正樹 (ONO Masaki) (10302340)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	
研究分担者	大和　啓子 (YAMATO Akiko) (60640729)	群馬大学・国際センター・講師 (12301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計6件

国際研究集会 第14回日本語コミュニケーション研究会	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 第13回日本語コミュニケーション研究会	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 第12回日本語コミュニケーション研究会	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 第11回日本語コミュニケーション研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第10回日本語コミュニケーション研究会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 第9回日本語コミュニケーション研究会	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	北京大学			
韓国	誠信女子大学			
エジプト	カイロ大学			